

P1-88 術前化学療法後に根治術を施行しえた子宮頸部扁平上皮癌例の予後因子の検討

東海大¹, 東海大八王子病院², 東海大磯病院³, 国立病院機構埼玉病院⁴近藤朱音¹, 高橋千果¹, 杉山太郎¹, 平澤 猛¹, 村松俊成¹, 宮本 壮², 村上 優³, 田中京子⁴, 三上幹男¹

【目的】術前化学療法(NAC)後に根治術を施行しえた子宮頸部扁平上皮癌II/III期例の予後因子の解析と術後補助療法の選択についての検討。【方法】1990年より2005年12月までにNAC後に根治術を施行しえた子宮頸部扁平上皮癌38例(IIA期6例, IIB期16例, IIIB期16例)を対象とした。術前にCisplatin, Nedaplatin等のプラチナ誘導体中心の多剤併用療法を動注あるいは静注で行った。術後補助療法は, 化学療法を8例, 化学放射線療法を12例, 放射線療法を16例に行った(なし2例)。腫瘍縮小率, 腫瘍マーカー値の推移, リンパ節転移の有無, ypTMN分類による予後について解析した。治療効果判定はRECIST基準, 有意差検定はLogrank test, 多変量解析はCox比例ハザードモデルを用いた。【成績】NAC前腫瘍平均径50.6mm(32-88mm), 中央値50.0mm, 縮小率48.1%(0-80%)。治療効果はCR3例, PR19例, SD4例, 判定不能12例。SCC平均値(ng/ml)14.1-4.2, SCC中央値5.4-1.2(NAC前, 後)。NAC前CEA高値例にはyN1例が多く見られた。術後病理診断にて23例に骨盤リンパ節転移, 8例に傍大動脈リンパ節転移を認めた(14例にPAN郭清追加施行)。yT1群はyT2群に比べ予後良好であった。複数部位リンパ節転移陽性の例, 総腸骨節転移陽性例は予後不良であった。リンパ節転移個数が3個以上の時には2個以下に比べて予後不良であった(p=0.06)。再発死亡はほとんどが3年未満で, 術後補助療法の違いによる予後の差はなかった。3年生存率は75%, 5年生存率は56.3%であった。【結論】NAC例においても根治術後の病理診断を十分に検討し術後補助療法を決定する必要があるが, さらなる予後の改善には新たな術後補助療法の開発が必要である。

P1-89 進行子宮頸部腺癌に対する Neoadjuvant chemotherapy の臨床的検討

武蔵野赤十字病院

梅澤 聡, 小林弥生子, 田村和也, 小林織恵, 大田昌治, 重田優子, 岩崎真一, 塚本可奈子

【目的】進行子宮頸がんに対する Neoadjuvant chemotherapy (NAC) の役割を検討する【方法】1988-2005年の期間に治療, 経過観察を行った子宮頸部腺癌のうち治療前に病理診断が得られ, かつ初回治療がCDDPを含む化学療法を受けた19症例を対象とし臨床データを検討した。検討項目は, 年齢, 臨床病期, 組織型, MRIによる腫瘍径, 腫瘍マーカー(CEA, CA125, 19-9, SCC), 抗癌剤治療効果, NAC後選択された治療方法, 術後無病生存期間とした。【成績】19症例の観察期間9-89ヶ月間(中央値34ヶ月), 年齢36-63, 臨床病期Ib₂:6例, IIa:3例, IIb:7例, IIIb:3例, 組織型Mucinous type 5例, Endometrioid type 14例, 腫瘍マーカー陰性4例, 陽性15例(CEA7, CA125 11, CA19-9 9, SCC 0) 抗癌剤治療効果PR; 13例, NC; 2例, PD; 4例, NAC後の治療法, 手術療法15例, 放射線療法2例, 抗癌剤治療2例, NAC後の手術施行率は79%(15/19)手術療法における肉眼的完全摘出率87%(12/15)残存症例は膀胱浸潤1例, 腹膜播種1例であった。術式は広汎子宮全摘出術が12例に行われ, 拡大術式として膀胱部分切除1例, 膀胱全摘出術2例, 直腸低位前方切除術1例を行った。術後再発例は33%(4/12)術後無病生存期間は16-81ヶ月間(中央値29ヶ月間)【結論】進行子宮頸部腺癌に対するNACは完全手術を行えた場合の再発率は33%であり根治療法を目指す戦略のなかで重要な位置を占めると考えられる。また, 完全摘出を可能とするための術式拡大は, 骨盤機能外科手術として検討すべき課題と思われた。

P1-90 進行子宮頸癌における Neoadjuvant chemotherapy (POMP療法) の治療成績の検討

産業医大

鏡 誠治, 川越俊典, 松浦祐介, 土岐尚之, 蜂須賀徹, 柏村正道

【目的】今回, 我々は子宮頸癌に対する Neoadjuvant chemotherapy として以前より使用している POMP (peplomycin, vincristine, mitomycin C, cisplatin) 療法の有効性について検討した。【方法】当科で1992年5月より2006年5月までに手術前あるいは放射線治療前に POMP療法 (peplomycin 3.5mg/m² day 1-5, vincristine 0.7mg/m² day 5, mitomycin C 7mg/m² day 5, cisplatin 50mg/m² day 5) を施行した, 腫瘍径4cm以上の進行子宮頸癌28例を対象とした。年齢は27-78歳(平均50歳)であった。施行回数は1-4回(平均2回)であった。臨床進行期はIb₂期が5例, IIa期が3例, IIb期が12例, IIIb期が2例, IVa期が1例, IVb期が5例であった。組織型は非角化型扁平上皮癌が20例, 角化型扁平上皮癌が7例, 腺扁平上皮癌が1例であった。観察期間は5ヶ月-13年5ヶ月(平均42ヶ月)であった。【成績】Neoadjuvant chemotherapy の治療成績は, CR1例, PR14例で, 奏効率は53.6%であった。その後手術を施行したのが14症例(Ib₂期:5例, IIa期:3例, IIb期:6例), 放射線治療を施行したのが14症例(IIb期:6例, IIIb期:2例, IVa期:1例, IVb期:5例)であった。再発は11症例でみられた。その初回再発部位は局所が4例, 遠隔が9例であった(2例は重複)。転帰は手術と放射線療法でそれぞれ無病生存が11例, 3例, 担癌生存が0例, 3例, 癌死が3例, 8例であった。【結論】進行子宮頸癌に対する POMP療法では遠隔転移を十分抑えきれない可能性が示唆された。